

領域番号	1601	領域略称名	古代アメリカ文明
研究領域名	古代アメリカの比較文明論		
研究期間	平成26年度～平成30年度		
領域代表者名 (所属等)	青山 和夫（茨城大学・人文社会科学部・教授）		
領域代表者 からの報告	<p><u>(1) 研究領域の目的及び意義</u></p> <p>本領域研究の目的は、①精密な自然科学的年代測定法や古環境復元によって、メソアメリカとアンデスの高精度の編年を確立し環境史を解明する、②精密な編年を基にメソアメリカ文明とアンデス文明の詳細な社会変動に関する通時的比較研究を行う、③植民地時代から現代まで、メソアメリカ文明とアンデス文明が中南米の先住民文化に及ぼした影響について古代文明の資源化をキーワードとして検証することである。さらにこれらの成果を基に導かれる古代文明研究の今日的意義を探求する。本研究の意義は、以下の通りである。</p> <p>(1) 北半球で確立した世界標準の年代目盛と南半球の低緯度の誤差を年輪年代法で修正することによって、古代アメリカ文明の盛衰に及ぼした環境変動や他の要因をより精緻に検討することが可能になる。(2) 従来はテーマ毎の比較考古学研究はあっても、メソアメリカ文明とアンデス文明が個別に研究される傾向が強かったのに対して、本研究は旧大陸の文明の影響を受けずに発達した一次文明としての両文明それぞれの特性や社会変動を多面的に比較し、人類の文明の多様なあり方を明らかにする。(3) 研究対象とする時代を先スペイン期に限定するのではなく、植民地時代や現代の中南米の人々が古代文明を資源化して再解釈するのを示し、古代アメリカの「文明の終焉」の概念を批判的に検討する。本領域研究は、世界史における諸文明の共通性と多様性を再認識し、従来の西洋中心的な文明史観では得られない新しい歴史的知とバランスの取れた「真の世界史」・「真の文明史」の構築に大きく寄与する。</p>		
	<p><u>(2) 研究成果の概要</u></p> <p>本領域研究は、人文科学と自然科学の多様な研究者が集い、新たな視点や手法による共同研究を推進して、古代アメリカの比較文明論の新展開を当初計画通りに達成することができた。堆積物の深度-年代モデルと年縞の計数に基づいた超高精度編年を確立し、航空レーザー測量を用いた地形の把握と考古遺構の探索に成功した。アンデスとメソアメリカの類似点は多いが、たとえば農耕社会や階層化社会が成立したこと及び公共祭祀建築に強い関心もたれたことが挙げられる。一方「はじめに神殿ありき」のアンデスでは先土器時代に公共祭祀建築が建造され、公共祭祀建築→農耕定住→土器→王都という社会変化の過程があった。インカ帝国のような巨大な社会が最終的に成立したにもかかわらず、マヤ文明のような文字はなかった。対照的にメソアメリカでは「はじめに土器ありき、神殿は土器の後」であり、土器→公共祭祀建築→農耕定住→文字→王都（都市）という社会変化の過程があった。アンデス文明は神殿を中心に社会統合を試み、一般的に大規模に集住することを選択しない社会であり、ナスカはその一例といえる。アンデスの祭祀の中心地では、文字ではなく公共祭祀建築が資源化され、社会を突き動かす重要な役割を果たし続けた。先史アンデス社会には、メソアメリカや旧大陸の都市文明に見られるような都市は誕生しなかった。古代アメリカ文明を客体化し資源として活用するという行為は、植民地時代以降の中南米で行われているだけでなく、メソアメリカとアンデスにおいて先スペイン期か</p>		

	<p>ら行われた。たとえば、公共祭祀建築の増改築、「語り」や「見せる」行為を物質化した文字や図像など数世代から数世紀前の過去の事物に着目し、資源として利用するという行為が行われ続けた。本領域研究の成果は、「古代アメリカ文明はスペイン人の征服によって消滅した」という一般的な見解に再考を促す。本領域研究は温故知新の言葉通り、現代の中南米諸国における歴史認識の刷新、古代アメリカ文明を資源とする芸術的創造、産業化、観光振興、国民の文化的アイデンティティの形成、中南米の地域的アイデンティティの形成に寄与する。</p>
--	--

<p>科学研究費補助金審査部会における所見</p>	<p>A（研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの成果があった）</p>
	<p>高精度の編年を基にメソアメリカ文明とアンデス文明の社会変動を明らかにして比較研究するという当初の設定目的は期待通り達成されたと評価できる。古環境・古気候研究と考古学の協働からは、期待に違わず堅実な研究成果が出された。また、その調査研究の過程で、低緯度地帯における堆積物の年縞計測に基づく高精度編年の新手法の確立などもあり、分析手法と分析結果の両方で高い成果を上げたと言える。さらに、航空レーザー測量等を駆使したナスカの地上絵の現地調査も多くの研究成果を生み、その成果が地上絵の遺構保護に活かされるものとしてペルー政府から高く評価された点は「古代文明の資源化」の実践と見なすことができ、本研究領域による研究成果の活用が社会的貢献の一つとなったことは特筆するに値する。以上の諸点から、新学術領域研究（研究領域提案型）として十分な成果を上げたと言える。</p> <p>しかし一方で、最終的な目標である比較文明論、とりわけ、「古代アメリカ文明史と環境史の比較」に関する研究成果については、概説的な記述と説明にとどまっているので、これから出版が計画されている出版物に期待したい。</p>